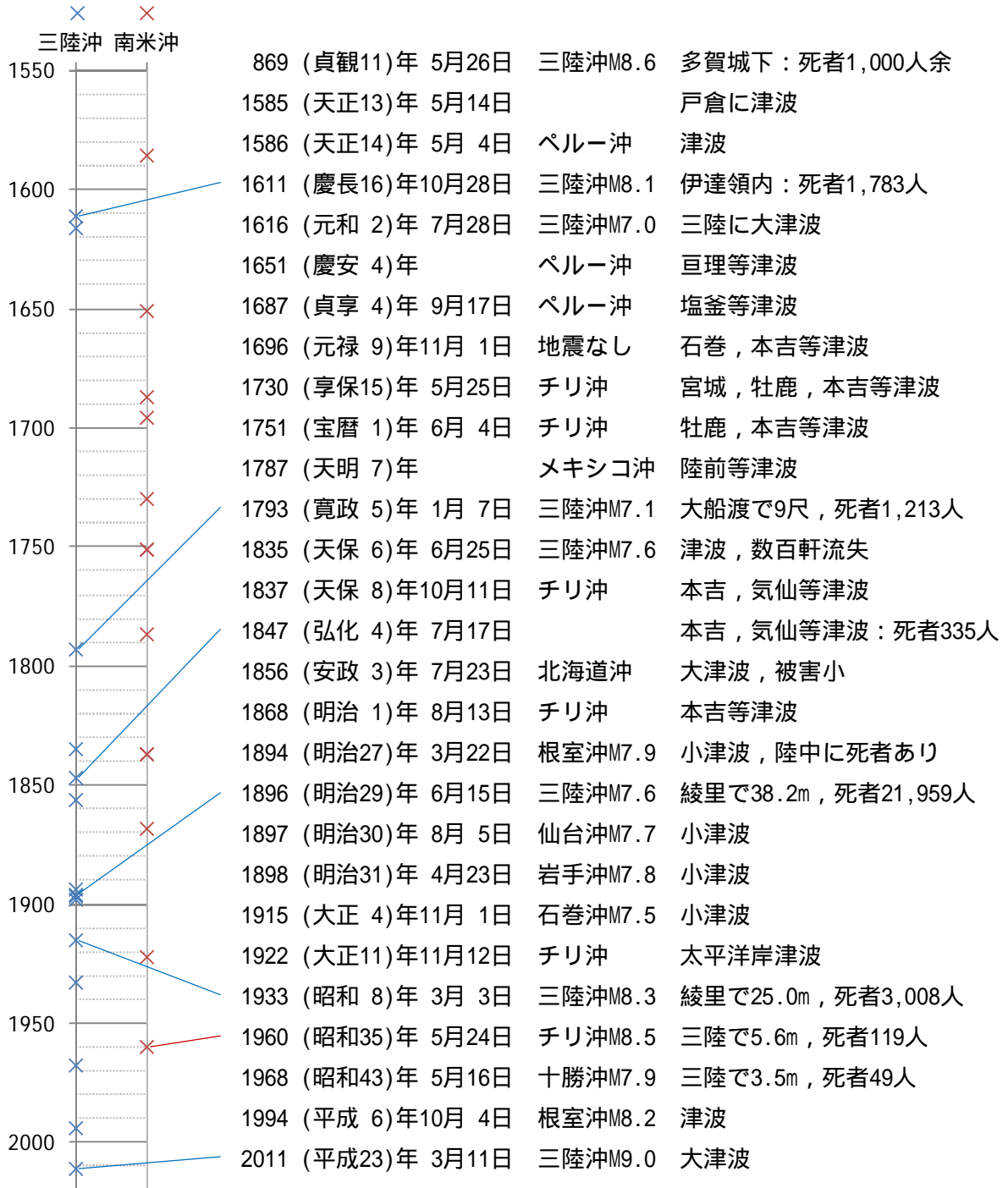


第2章 震災の総括

1. 過去の震災の履歴

三陸沿岸では貞観津波をはじめ、数多くの津波を経験している。三陸沖だけでなく南米沖を震源とする津波を合わせ、10～20年に1回は津波の記録があり、50年に1回程度は多数の死者が出るなど大きな被害を受けてきた。



明治以降，南三陸町で大きな被害を受けた津波は，明治三陸大津波（明治 29 年），昭和三陸大津波（昭和 8 年），チリ地震津波（昭和 35 年）と今回の東日本大震災（平成 23 年）である。

明治三陸大津波（1896(明治29)年6月15日 三陸沖M7.6）

波高：志津川 平均3.6m，歌津・石浜12.6m，中山10.8m，田の浦10.3m

死者：志津川 441人（清水浜 168人，細浦 122人，沖の須賀・埋地 34人）

歌津 799人（田の浦 208人，中山 152人，名足 115人，など）

流失：志津川 175戸（清水浜 60戸，細浦 34戸，沖の須賀・埋地 36戸）

歌津 273戸（伊里前 60戸，田の浦 52戸，港 39戸，など）

昭和三陸大津波（1933(昭和8)年3月3日 三陸沖M8.3）

波高：志津川湾平均波高2.9m

死者：志津川 1人，歌津 84人

流失：志津川 7戸，歌津 60戸

チリ地震津波（1960(昭和35)年5月24日 チリ沖M8.5）

波高：戸倉折立4.35m

死者：志津川 41人，歌津 なし

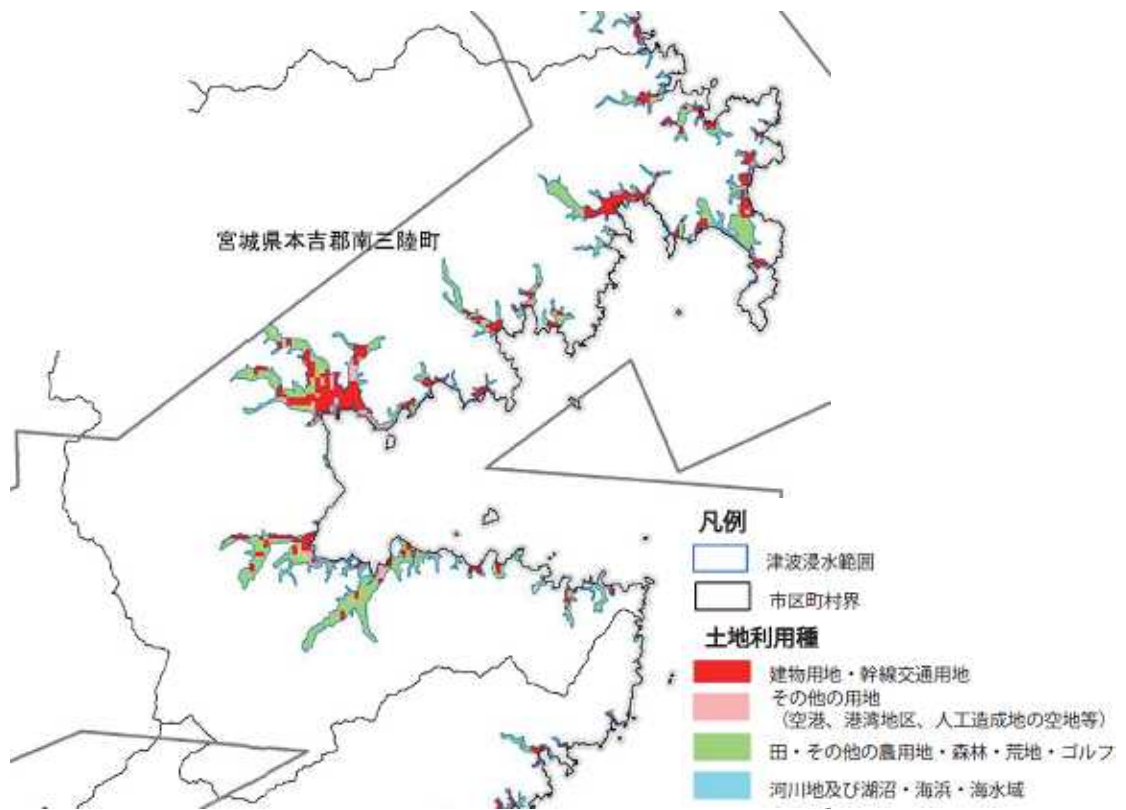
流失：志津川 312戸，歌津 7戸



チリ地震津波（昭和 35 年 5 月 24 日）

出典：志津川町誌 「歴史の標」1991

東日本大震災（2011（平成23）年 3月11日 三陸沖M9.0）



2. 津波防災対策とまちづくりの変遷

南三陸町では、たびたび起こった津波や大火がまちづくりに大きな影響を与えてきた。ここでは志津川地区における変遷を辿ってみる。

江戸時代のまちづくり

八幡町あたりはたびたび津波の被害を受け、八幡川の東に移ったと伝えられている。寛文8年(1668)の碑には「高橋仁左衛門が五日町から十日町の町割りをした」ことが記され、五日町大契約講の由来には「八幡町周辺は津波被害が多く、川に囲まれ避難が難しいことから、八幡川の河床を変更し、海円寺山周辺を埋め立て、移転するために元禄4年(1691)に契約講を組織した」とある。

この時期、志津川地区の人頭は寛永18年(1641)の113から安永3年(1774)には358と3倍以上に増加し、明治までほぼ同規模で推移している。

八幡町は新町とも呼ばれており、その名の通り新しい町のようなのである。また、十日町より海側は海岸か湿地帯であったと思われる。



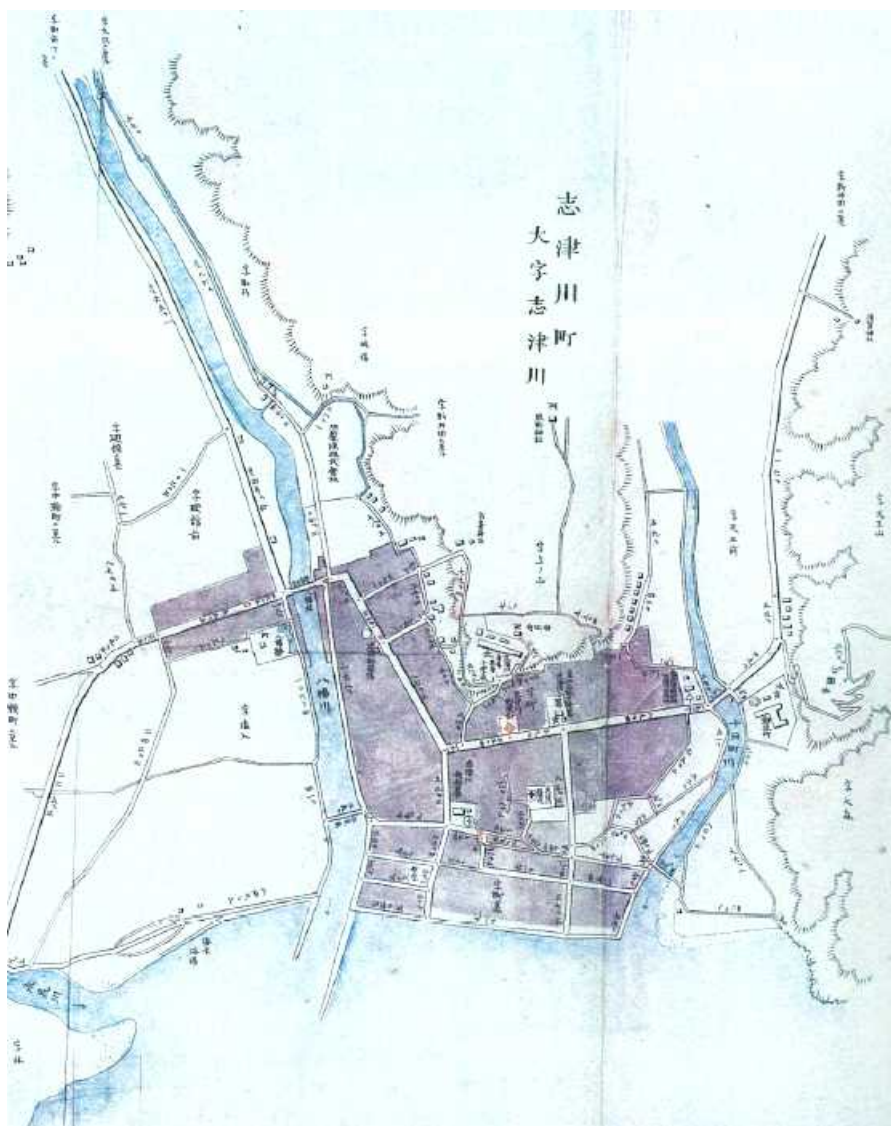
気仙道 [本吉宿] 位置図

出典：南三陸町観光協会 <http://www.m-kankou.jp/kanko/>

明治 29 年三陸大津波後のまちづくり

気仙道沿いの八幡町～五日町～十日町を軸としたまちづくりが行われ、明治 30 年に十日町に横丁「桜小路」を新設、明治 35 年には志津川病院が十日町に移転、志津川郵便局が十日町に新設される。志津川町役場は明治 39 年に海円寺山に建築されるが、明治 43 年には塩入に移転する。

東山公園、旭公園、黒崎公園、八幡公園が皇太子殿下御結婚奉祝記念事業として明治 33 年に整備され、大正元年には松原公園整備が議決される。一方、高台には大正 6 年に私立宮城女子技芸学校が上の山に、大正 13 年に志津川実科高等女学校が海円寺山に設立された。



明治 43 年の志津川街区地図

出典：志津川町誌 「歴史の標」1991

昭和 8 年三陸大津波後のまちづくり

志津川漁港改修が行われ，昭和 12 年に荒島防波堤が竣工，昭和 20 年に志津川漁港改修工事が竣工する。

昭和 12 年の志津川大火後，昭和 15 年から区画整理事業に着手，昭和 29 年に換地処分が完了する。

昭和 35 年チリ地震津波後のまちづくり

災害復旧事業として防潮堤，水陸門の整備を行い，昭和 38 年に竣工。昭和 43 年の十勝沖地震津波は水産関係の被害にとどまる。

昭和 35 年 8 月に区画整理事業発足，昭和 43 年に完了。塩入に郵便局移転（昭和 38 年），母子健康センター新築（昭和 44 年）。松原公園に松原グランド（昭和 37 年），陸上競技場（昭和 47 年），中央公民館，体育館，野球場（以上昭和 48 年）を整備するなど，津波浸水域の開発が推進される。

3. 地震・津波災害の状況と教訓

志津川地区では，たびたび起こった津波に対して，埋め立てや防潮堤の建設によって低地を開発し，発展してきた。特に，チリ地震津波以降は，50 年に 1 度の明治三陸大津波，昭和三陸大津波，チリ地震津波程度の津波を想定した津波防災対策によって，津波からは守られているという意識があり，病院や公共施設といった被災時の最重要施設も低地に整備されてしまった。しかし，今回の津波は 1000 年に一度という想定を遙かに上回る津波であり，これによって市街地が壊滅的な状況に陥ったことを教訓とする必要がある。

一方，学校は市街地に隣接する高台にという思想は貫かれ，今回の震災でも避難所として機能を果たすことができた。今回の震災復興計画では，これまでの災害と復興の歴史を踏まえ，頻度の高い津波から人命と財産を守りつつ，それを上回る津波に対しても人命を守り，早期の復旧・復興が可能となるようなまちづくりを再構築していく必要がある。